

## 第五回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

大森荘蔵 著『時間と自我』（1992年3月19日 青土社 刊）

**大森 荘蔵** おおもり しょうぞう 大正10年（1921）生まれ。平成9年（1997）没。岡山県出身。

専攻は、哲学。東京大学理学部・文学部卒業。東京大学名誉教授（受賞時）。著作は、主著に『言語・知覚・世界』、『物と心』、『流れとよどみ』、『新視覚新論』、他がある。

### 受賞のことば

哲学という全く個人的な作業に対して賞を戴くことには、とまどいを感じます。面はゆい思いで光栄に存じます。

終戦後の寒い階段教室で講義を聴いた和辻先生に対しては何か失礼な様な気がしますが先生の一つのきまぐれとしてお礼申し上げます。

### 《選考委員評》

勝部 真長

時間論は哲学者の登竜門である。ハイデッガーは三八歳のとき『存在と時間』を書いて一躍世界の哲学界に名をなした。それ以来、ハイデッガーの哲学書を翻訳したり、祖述したりするのを仕事にしている哲学者は数多くいる。ヘーゲルでもキェルケゴールでもハイデッガーでも、一たん巨匠の作品に惚れこんで首までつかると、研究者自身の日常的現実を見失ってしまう場合が多い。つまり常識を忘れて、哲学書の範囲内での思索に終始してしまうことになる。

和辻先生の倫理学は常識の線を見失わない立場を守られた。西田幾多郎の哲学も、日常的現実の世界を重んじたが、その日常的世界の中心に禅的体験が坐りつづけていた。

本書の著者は、その常識の線をしっかり守りつつ、古今東西の哲学説を視野にいれて、彼独自の時間論、存在論を、日本語で思索し、日本語で語るのである。既に過去に大著を書いていて、本書はエッセー風の小論にすぎないが、しかし円熟した著者の思索と語り口は、他の哲学書には見られない絶品のもので、巻を措くのを忘れさせる。

とくに哲学史上のアポリアとされていた、エレア派のゼノンのパラドックス（飛矢は飛べない、アキレスは亀に追いつけぬ）を、物理学の線型時間を原生時間に照らして再構成することで解決しようとする。

又、プラトン以来の「想起」経験を据え直すことで、過去・現在・未来の連続と非連続、そして「夢」の在りかたを突き止める作業など、哲学的思索の醍醐味を示すものである。

全盲の達ちゃんという幼稚園の子供の実例から、他我問題が開け、哲学者仲間のデッチ上げた哲学病の批判に及ぶ展開は、心憎いばかりである。

湯浅 泰雄

大森荘蔵氏は、科学哲学の分野でこれまで多くの業績をあげてこられた哲学界の長老である。今回授賞の対象となった『時間と自我』は、科学における時間のとらえ方と自我（主体としての人間）の体験における時間のとらえ方を対比考察することによって、生きた時間の性質と意味を明快に示した研究である。この問題はかつてベルグソンがとりあげたことがあるが、科学を相手にしなくてはならない難問であるため、その後とり組む哲学者もいなかったものである。

常識は、時間は連続的（客観的）に流れると考える。科学の時間（線形時間）はこれを精密にしたもので、時間を、直線上を移動する点のように表現している。しかしこれは運動の軌跡を運動そのものにおきかえて見る思考習慣によるもので、古代ギリシアのゼノンの指摘（アキレスは亀を追い抜けない）以来の矛盾におちいる。大森氏は、主体の時間体験（原生

的時間)に即して、現代科学の諸事例や仏教の刹那滅の考え方等をも参照しつつ、線形時間に内在する問題点を具体的に示しながら、原生的体験における時間のとらえ方を明らかにしている。過去とは元来、主体の想起体験を通じてのみ見出されるものであって、それを外在化して実在する過去を設定するところに線形時間が考え出されるのである。また自我とは元来世界に対する心身的動作の主体として想定されているもので、自我は、そこに見えている世界を、立体を平面(見え)としてとらえる「二重視」を行っている(絵画はその例)。その平面的見えを極限化したところに、持続ゼロの「瞬間」が想定される。しかし、立体としての世界の事物に行動的にかかわっている自我の現在体験(「今………の最中」としての今)はゼロまで限定できない。過去、未来は、そういう主体の現在体験の手前、彼方として主体的に体験されているものである。時間と自我は双生児のようなものである。

大森氏の時間論はきわめて創意にとむものであるが、評者は、現代の科学者の中にも従来の線形時間に疑問をもつ人が出てきているということを一言つけ加えておきたい。たとえばプリゴジン(ノーベル化学賞)は、現代科学の時間が過去・未来を同質にみる可逆的量的時間であることに疑問を呈し、時間は本来一生命進化の歴史が示しているように一非可逆的な質的時間ではないかと言っている。科学も今日、生きた主体における「とき」(タイミング)の体験の意味について考えるべきではなかろうか、と思う。

大森氏の本には、この他に、哲学上の難問とされてきた他我問題や、俳句のような言語芸術における知覚の問題をあつかったすぐれた論考が収められていることを、申し添えておきたい。

#### 坂部 恵

著者の大森氏は、一九二一年の生まれ、戦争末期に物理学を学んで、のち哲学に転じ、一九五〇年代、まだ戦後の思想的混迷のおさまりきらぬ時期にアメリカに学び、後期ヴィトゲンシュタイン、クワインといった彼地におこなわれる哲学の新しい動向をいち早く日本の学界にもたらして、その方面でのパイオニアの役割を果たし、いわゆるイギリス経験論の伝統から現代英米の哲学におよぶひろく深い素養を生かし、それをまた完全に自家薬籠中のものとして、天性の繊細な感受性と強靱な論理的思索力を駆使しつつ、科学哲学から哲学一般におよぶ多彩な主題にわたって、見事な日本語で独自の考察を展開し、多くの業績をあげて、今や日本を代表する哲学者のひとりに数えられる方である。

本書は、その大森氏が、「時間」と「自我」という、現代哲学の根本問題でもあり、また氏自身の年来の思索の集約点でもある問題をめぐって、円熟した筆で、しかし同時にまたなお旺盛な開拓の意欲をもって、ここ数年折々に書き下ろされた十二編の論稿の集成である。全体は、①時間の問題、②自我と他我の問題、③知覚と芸術の問題にかかわる三つの部分に分かたれるが、そのいずれにおいても、ごく日常的な経験に即しつつ、「過去」や「他我」とのかかわりといった一見何気なく見えることがらが、じつは日常の常識によっては律しきれない、というよりは、まさに当の日常の常識の目をもってしてはかえって覆い隠されてしまう類の思いがけないパラドックスをはらむ所以が明快に示され、われわれ自身の個人的・集団的な心の深層の生きたありようが、精緻なしかし平明な叙述を通して明るみに出されている。われわれの世界体験またとりわけ美的体験の基底をなす「風情」の諸相を考察した終章は、なかでも印象深いものであり、大森哲学の新しい展開の一面を示すものであろう。